研究、論説、詩歌、随筆の小誌（未発表のもの）
『羔』（No.2）
――1932年12月――

1932年12月
小池辰雄

（内容）

第十回のクリスマス
詩篇（2）（自由訳）
第6篇　第7篇　第8篇　第9篇　第10篇
「いのり（2）」
2．祈の哲学　　イ、祈の本質
「眠りなき夜のため」上巻（2）　　ヒルティ
11月5日　11月18日　11月19日　11月22日　11月28日　11月29日
「星のたより」（2）　「わが兄の『村の鍛冶屋』の絵」
（其3）「村の鍛冶屋」　　ロングフェロー
「樅の日記」（2）　　小池政美
1918年11月24日〔つづき〕
「夕の所感」
「みどり葉」（2）　「うたの心」
1927年　1928年　1929年　1930年　1931年　1932年

＊

――世は暗し、預言は光る――

8 **愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前（みまえ）には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。**

9 **主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改（くいあらため）に至らんことを望みて汝らを永く忍び給うなり。**

10 **されど主の日は盗人（ぬすびと）のごとく来（きた）らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にある工（わざ）とは焼け尽きん。**

11 **かく此等（これら）のものはみな崩るべければ汝等いかに潔（きよ）き行状（ぎょうじょう）と敬虔（けいけん）とをもて、**

12 **神の日の来るを待ち之を速（すみ）やかにせんことを勉（つと）むべきにあらずや、その日**

には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。
13されど我らは神の約束によりて、義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。

――ペテロ後書第3章8～13節

＊

第十回のクリスマス

１９３２年暮

１９３２年（大正12年）の春、信仰の道へ第一歩を踏み入れてから、この暮でちょうど十回の降誕節を迎えることになる。復活節は既に十度讃美したわけである。顧みれば私にもまた感慨無量なるものがある。既に十年の流れである。歩みし跡は蹉跎たるものであったどころか惨憺たるものである。どうして懺悔、悔改の涙が新たでなかろうか。そこには罪があった、病苦があった、迷妄があった、怠慢があった、不孝があった、あらゆるものがあった。

「ああわれなやめる人なる哉」

である。しかし闇を破る天来の光、渇けるを潤す慈雨も豊かであった。それらの恩恵ここに一々挙げる遑と意図とを有たない。ただわが胸にむらがり起こる幸なる思い出の故に私はまた感謝にみたされる。それは何処へわが心の眼を向けしむるか、キリストの十字架へである。悔改も感謝もキリストの十字架へである。過去十年間に知ったことはこの十字架である。そしてこれのみである。復活と来世の大真理をして暫く措かしめよ、わが心をただ十字架に往かしめよ。道徳法則がいかに変じ、神学哲学がいかに移りゆくとも、私もまたパウロのように十字架のほかに求むるものがない。

「十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の力なり」（コリント前1・18）

とは本当にわが声となった。イエス自ら最大の愚者となり給うて、一番馬鹿を見給うて、我らに生命を、永遠の生命を与えて下さったのである。何よりも先ず重い重い罪をすっかりなきものにしてしまって下さったのである。罪をゆるされ、死も死とならず、永遠の生命は与えられ、希望は漲り、歓喜は溢れ、神の力はいよいよ新たに……いったいこれはどうしたことなのであるか。恩恵とは夢よりも甚だしい夢ではないか、それが事実中の最も確実な事実であるとは！　ああ友人よ、同僚よ、知人よ、血肉よ、親戚の者よ、わが教え子よ、小さき人々よ、来りてこの嘉き音信をきかずや！

「1我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、2我に大いなる憂あることと心に絶えざる痛あることとを、我が良心も聖霊によりて証す。3もし我が兄

弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」（ロマ書9・1～3）

と叫びしパウロの心が、幾分であるか知らぬが、衷心から然りと言われ得る。

底知れぬ闇を私は見る、胸が熱くなって涙が涸れている。どうして時に私はそんな悲しみに襲われるか、本当に人の世はキタナイからである。二十世紀も三十有二年を満たそうとしている。よくも滅びうせないと云うものだ。神様はよくもこんな罪の世を見逃して居られる。この世界が在るのが不思議である。本当にもしキリストの十字架がなかったならば夙に滅亡の世界となっているだろう。光がないからである。今にして知る、イエスの死にまさってこの世に真なるものはないことを。全世界が何ものかとなってイエスの死を事実たらしめたのである。おそろしき暗黒の影よ、おどろくべき愛の事実よ！　二十世紀の果ては何処か。神とキリストと聖霊は黙って居られる。しかししかし、私は見、神は知り、神は愛し給う。ただこの事実、深き見えざる事実の故に我らはおそれず、うれえず、一切を信頼してゆこう。

ただこの叛逆と虚偽と偽善と醜悪と殺伐の世にあっては我らの道は十字架であることを確く知る。義のために戦わないならば、愛のために日に日に生命を棄てることを志さないならば、十字架の信のいつわりなることを自らに知らねばならぬ。

「20我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

アーメン。

すぎし秋の恩恵を感謝し、来らんクリスマスを歓び迎え、来ん年の戦いを祈り、死のため義のため愛のため、而して聖名の栄光のため我らの小さき歩みをまじめに前み行かなん。

神様、有難うございました。きよく雄々しく三十年の年を迎えしめて下さい。

詩篇（2）（自由訳）

RUDOLF KITTEL : BIBLIA HEBRAICA, PSALMI.

第6篇～第10篇

――訳文上の規約――

〔……〕―― 原文になき語の挿入、訳文の語調より。

（……）―― 原文にあれども訳文としてはなきをよしとするもの。

原稿用紙第二字目（第二枠）より書きはじめてあるは原文（題本の）にて行の改まりて居らぬもの。原文にて行の改まりたるときにのみ第一字目より記せり。例えば第6篇第6節の如し。

節の区分は便宜上、邦語訳聖書のそれに従いたり。

（神の名）は「ヤーヴェ」とせず、従来の通り「エホバ」と訳せり。

＊

第6篇

伶長（うたのかみ）をして八音（やつね）の琴に合わせて、ダビデの歌。

1 〔ああ〕エホバよ、（あなた）怒りを以て私を懲らしめないで下さい。
（あなたの）憤りを以て私を懲らしめないで下さい。

2 エホバよ、私をお憐（あわれ）み下さい、萎（しぼ）み衰えます私は！
エホバよ、私を医（いや）して下さい、戦（わなな）いています私の骨は！

3 私の霊魂さえも甚（いた）く震えています、
斯（こ）うして貴神エホバよ何時（いつ）まで〔でございますか〕。

4 帰り給え〔ああ〕エホバよ、救って下さいわが霊魂を、
（私を）助けて下さいあなたの御恩恵の故を以て。

5 誠に死んではあなたを憶（おも）うことなく、
陰府（よみ）にあっては誰があなたに感謝しましょう。

6 私は疲れました、私の呻吟（うめき）の中で。
私は夜な夜な（わが）床を漂わせます、
（わが）涙で私の衾（ふすま）を溶かします。

7 衰えました、私の眼は悲哀（かなしみ）のために、
（それは）老いましたあらゆる敵のために。

8 離れ去れ私から、すべて汝ら邪曲（よこしま）をなす者ら！
そはエホバが聴き給うたから私の哭（な）く声を。

9 聴き給うたのだエホバは私の願いを、
　エホバは私の祈りを受けたもう。
10 甚く恥じまた逆らうだろうわがすべての敵は、
　彼ら帰りゆき恥じらわう束の間に。

＊

第7篇

　エホバに謳ったダビデのシッガーヨーン、ベニヤミンのクシの言の故に。
1 〔ああ〕エホバわが神よ、汝に私は依頼みます、
　（私を）お救いください私に追迫るすべての者より、そして私を援けて下さい。
2 でなければ彼は獅子のようにわが霊魂を掻き裂きます、
　掠められても（而も）援け手は一人として居りません。
3 〔ああ〕エホバわが神よ、若し私が之れをしましたならば、
　若しわが手に邪悪が在りますならば。
4 若し私に平和なりし者に私が悪を〔以て〕報いましたならば、
　私は私に救なくとも仇たりし者をさえ助け（も）しましたのに！
5 〔若しそうならば〕仇人がわが霊魂を追い（また）捕えますように、
　（そして）わが生命を地に踏みつけますように！
　斯うしてわが栄光を塵に据えてしまいますように！　（セラ）
6 お起ち下さいエホバよ、汝の怒りを以て！　起き上がって下さい、わが仇の苛立ちに向かって、
　（そして）目醒めて下さい私のために、汝は審判を降し給うた〔のではありませんか〕。
7 （そして）諸国の民の集いをして汝を囲ましめ、
8 （そして）その上なる高きところへ帰り給わんことを。
8 エホバは諸国の民を鞫き給う、
　エホバよ私をお鞫き下さいわが義に循って、またわが直きに従て私を。
9 どうか終局に至らしめて下さい悪人の悪を！
　けれども汝は義人を建て給います。
　斯くして心と腎とをお試み下さい、義なるエホバよ！
10 わが楯は神に〔こそ〕ある、心の直き者を救い給う者ぞ！
11 神は義しき審士、（また）神は日毎に憤る者！

12 人が若し立ち帰らぬならば彼はその剣を研ぎ、
　その弓を張って（且つ）構え給い、
13 また是れに死の器を備え、
　その矢をば燃ゆるものと彼はなし給う。
14 見よ、その人は邪悪を産むに苦しみ、
　また害悪を孕み、（また）虚偽を生む。
15 坑を彼は掘りまた穿って、
　而も彼は自ら穿ちたる坑に陥った。
16 その禍害は自分の首に帰り、
　（また）その頭の嶺きにおのが強暴は降るのだ。
17 私は感謝しようエホバに、彼は義に在ますから、
　されば讃め称えよう至高きエホバの聖名を。

＊

第８篇

　伶長をしてギッティースにより、ダビデの歌。

1 〔ああ〕エホバわれらの主よ！　如何に（汝の）聖名は輝かしいことですか
全地に！
　汝が（汝の）栄光を天に据え給いましたればこそ。
2 幼児と嬰児の口を通して、(1)汝は力を据え給いました、汝の敵の故に。
　敵と怒ある者とを鎮めんがために。
3 （私）汝の指の葉なる諸々の天を観、
　汝の投げ給うた月と星々とを観ますのに、
4 何で人間は汝が（之を）顧い給う程なのでしょう、
　（また）人の子は〔何で〕汝が（之を）たずね給う程なのでしょう。
5 而も汝は人を神より少しく劣らしめて、
　之に栄えと貴きを冠らせ給いました。
6 汝は之に聖手の業を治めしめ、
　すべてのものをその足もとに置き給うたのです、
7 羊と牛とはそのすべてを、さらにまた野の獣を。
8 諸々の空の鳥と海の魚、また諸々の海路を通うものとを。
9 〔ああ〕エホバわれらの主よ！　如何に（汝の）聖名は輝かしいことですか
全地に！

(1)「汝」の字は「あなた」と訓ず。以下準之。但し、時に「なんじ」と読むことさまたげなし。

＊

第9篇

伶長をして、ムート・ラッベーンに依り、ダビデの歌。

1 私は感謝しようエホバにわが心を尽くして、
私はのべましょう汝の奇しき聖業を 尽く。
2 私は汝の中に楽しみ喜びす、
私は汝の聖名を讃め称えます、いと高き者よ！
3 わが敵は踵を返すとき、
汝の聖前に躓き倒れて滅びましょう。
4 汝が私の審きと訴えとをとりはからい、
（汝の）聖座に坐り、義しく審きてあり給うから。
5 汝は諸々の国を責め、悪しきを滅ぼし、
彼らの名を世々限りなく（汝は）消し給いました。
6 〔ああ〕敵！ 彼らは滅亡に帰して永劫に。
諸々の邑は汝の 覆 すところとなり、彼らの追憶、〔否〕彼らは亡びました。
7 （そして）エホバは永遠に坐し給う、
彼はその聖座を審判のために据え給うた。
8 （そして）彼は義を以て世を審判き、
（また）民らを直きに従って判決め給う。
9 エホバこそは虐げられたる者の高き拠処、
苦難の期の高き拠処ぞ。
10 されば汝に依り頼みます聖名を知る者は、
汝は汝を求むる者を棄てたことがございませんから、エホバよ！
11 讃めうたえ、シオンに在ますエホバに向かい、
宣べよ、諸々の民に彼の聖業を。
12 そは血を問い糺す者は彼らを心に留め、
苦しめる者の叫びを忘れ給うことなければ。
13 （私を）あわれみ給えエホバよ！ 観て下さい、私を悪む者からこの患難を。
〔ああ〕死の門から私を引き揚げて下さった方よ！
14 さらば私は汝の讃美を 尽くシオンの乙女の門で述べ得ましょう、

あなたの救を喜び得ましょう。
15 諸々の国民は自分の作った阱に陥り、
彼らの隠した網に自分の足を捉えられた。
16 エホバは己れを知らしめ、（彼は）審判を行い給う、
自分の手の業に悪しき者は陥る。セッガイオン　（セラ）
17 悪しき者は陰府に帰るから、神を忘れた国民もすべて。
18 貧しき人々は常に忘れられているのではなく、
苦しめる者の希望は永遠に失せるのではない。
19 〔どうか〕起きて下さいエホバよ！　人が力を贏ち得ませんように、
国民らがみ前に審判かれますように。
20 〔どうか〕エホバ！　彼らに懼れをお置き下さい。
諸々の国民に彼らは人〔に過ぎないの〕であることを知らしめ給わんことを。　〔セラ〕

＊

第10篇

1 なんでエホバよ、遠くに立って居られるのですか、
〔何で〕匿くれて居給うのですか患難の期に。
2 悪しき者驕るときは困窮める者を甚く責める、
彼らが思いめぐらした巧智の故に彼らが攫えられんことを。
3 そは悪しき者はその霊魂の慾を誇っているからである、
また彼は貪る者を祝し、
4 エホバを蔑んでいる。悪しき者は驕れる顔で神は捜しはしないとなし、
神は在まさないと云うのが彼の考えのすべてである。
5 彼の道は確いようです如何なる時にも、
汝の審判は高く彼らから離れています。
6 彼の敵は之をすべて彼は吹き飛ばします。
6 彼はその心に語る、俺は動されぬ、
世に世を襲いで禍害には居らぬ者だと。
7 呪詛は彼の口に満ち、虚偽と暴虐も亦。
その舌の裏には残害と邪悪がある。
8 彼は村里の幽所におり、秘処で辜なき者を殺し、
その眼はおびえる者を覗う。

9 彼は洞窟にいる獅子の如く潜み俟ち、弱者を攫えんと伏し狙い、
　あわれなる者を捉えて網に曳いてゆく。
10 かくてその者は打ち砕かれて伏し、
　強勁ある者の下に仆れてしまう、その拠るべなき者は。
11 その者は言った（その）心の中で、「（ああ）忘れ給うたのか神は！
　匿し給うたその聖顔を、永遠に照覧たまわざらんために」と。
12 起きて下さいエホバよ！　神様　聖手をお揚げ下さい！
　お忘れにならないで下さい　苦しんでいる者を！
13 何故に悪しき者は神を侮っているのか、
　その者心の中で言うには、「彼は捜り求め給わぬ」と。
14 汝は覧たもうた、汝は艱難と悲痛とを見給うたのです、
　〔あなたの〕聖手に捉りたもうて。
　あなたに〔こそ〕不幸な者は身をゆだね、
　孤子には汝は助けであり給うた！
15 折り給え悪しき者の腕を、
　そして悪！　その悪を捜し給わんことを、〔もはや〕捜し得ない程に！
16 エホバは永遠に王に在ます、
　異国人は彼の国土から消え失せた。
17 困窮める人の願いを汝は聴き給うた　エホバよ！
　汝は汝の心を建て、汝の耳を欹て給う、
18 孤児と虐げられたる人々に審きをなさんために、
　地の人がなおも嚇やかしを増すことなからんがため。

「いのり　(2)」

2. 祈の哲学

茲に「いのり以前の問題」を前承しつつ私は論を進めて行こうと思う。

イ、祈の本質

生命が生命を慕う心、生命の寂しさの要求が、祈以前のいのりであって、云わばいのりの胚種であると思う。柿の樹はその胚種の中にその本質を宿しているように、いのりの本質もいのり以前の問題の中に既に宿って居なければならぬ。

人の生命は他の諸生物一般とは異なり、霊魂が活きていると云うこと、即ち精神的生命を意味するのであって、単に肉体的生命の活きてあることを生命と云うのではない。

されば、生命の寂しさの要求は、生物的生命の欠陥に由来する要求ではなくして、人格的生命の寂しさの要求である。人格は完全を求め、無限を慕う。完全を求め、無限を慕いて已まぬところの人格は、それ自体無限に追い求むる動的なるあるものである。求め求めて已まざる人格は、それ自体絶対なるあるものでなければならぬ。それ故に人格の価値は絶対である。それ故にまたその要求の対象は必然、絶対無限至高の価値を自らに現実に具有しているものであらねばならぬ。即ち、神、未だ「知られざる神」が要求される所以である。此くの如く人格者即ち人間の要求はその根本に於て全く倫理的要求である。さてまた思うに、この肉体を具うる人間が生きんとする要求は果たして全く倫理的要求であるか。しからば事実を誣いたる理念の曲解ではあるまいか、という疑問が生ずる。この疑問がどこまで正当な疑問であるかを少しく考えて見よう。

成るほど生きんとする要求は生物的要求であろう。しかしその生物的要求が意識にのぼって来たとき、いつまでも生きながらえたいと云う願望、永遠の生命を得んと要求する一自覚となったとき、それは既に生物的要求とは別個の要求となっているのである。縦え生物学上、心理学上、或は唯物論的立場から、この別個の要求すらも生物的要求の結果に過ぎぬと断じようとも、その生物的要求を倫理的要求に移らしむるところの原因は断じて生物的要求そのものによって説明され得べきものではない。

事の真相は生物的要求と倫理的要求は謂わば並行するものであって、生物的要求は無意識無自覚的存在としての人間、即ち人間の生物的存在たるの半面に於ける要求であり、倫理的要求は意識ある、自覚的存在としての人間、即ち人格的存在たるの半面に於ける要求である。しかしてこの霊肉両面の優越が霊にあり、人格が人間の中核であることは理性的存在者、即ちかく真理を「考うる我」の必然的要求である。

然るを物質に基礎を置かんとするところの唯物論者の「考うる我」を以て本質的「考うる我」なりと思惟する彼らの理性はそもそも何に喩うべきか。彼らは恰も詩人ダンテが地獄にて会いしかのおのが首を提灯の如く引提げたる肉体の如きものか。されば人格者の要求はそれが純粋であるとき全く倫理的であって、生物的なるものはその要求を倫理的なるものの前に消滅せしめられている、少なくとも意識の上では。そしてここにこそ人格者のいのちの神秘があると思う。そしてそれでこそいのちの不可分的霊的活物であると思う。されば倫理的要求はあくまでも潜在的に、先験的に先行しているものでなければならぬ。肉は本来排斥せらるべきものではなくして、霊肉一如のいのちにこそ純粋の人間の姿がある。此くの如き人間はあるべき本来の人間である。

斯く霊なる要求に生くるところに人間アダムの本来の姿があった。しかしながら人が罪を得て以来、人はその要求の正しき対象を見失ってしまった。このことはまた後の論にゆずらねばならぬ。人は「罪びと」たる人であろうと、「義人」たる人であろうと、いのりの本質に於ては変りなきはずである。また救われざる人にも要求があり、救われたる人にも要求がある。その寂しさの要求は、何ものか見えざる実在者と思わるる者の前に言を以て発表されるときに通常これをいのりと云う。しかしこの言は思想の発表手段の重要なる一形式であって、思想なくして言語なき以上、思想は言語の源である。思想はしかし統一するところの何ものかがなくしては思想であることを得ない。その内的に統一するところのものは何か、曰く、人格である。而して人格の中心はその意志にある。意志の本質は自由にある。

自由意志の実質は何であるか。そは善であるべきである。善は人格者の意志の実質たるべしとして考えられる限り、概念として遊離するのではなくして本質的に具わっているところの人格の向きであると私は言いたい。その人格の向きの在るところを善意志または良心と云う。善意志即ち良心はしかし直ちに善そのものではないと思う。――カントは善意志を以て絶対無条件に善と見做される唯一のものとなしたが、私はなお絶対真理（それは宗教的である）の立場からこれに論議を試みたく思う。それは後にあらためてなさねばならぬ。

――善を求むるところの心の向きの在るところである。然らば善を求むるところの心の向きそのものは何であるか。これこそはいのりであると私は断じたい。

そのいのりの本質は「まこと」であると思う。敢て本体とは言わない。いのりの本体については項を改めて考えねばならない。茲に於てか自由意志の向きはいのりであることを知り、人格の向きはいのりでなければならぬと知った。向きと云えば何か抽象的概念の如くひびくがそうではない。この向きこそはいのちの最も源より発する息吹の態度を意味する。息吹そのものの静中の動なる態度そのもの、これがいのりそのものである。斯くして、人格の本質的態度はいのりであらねばならぬ。生命の寂しさの要求がいのりの胚種であり、本質がそこにあると云うのはこの意味である。而してまことにいのりそのものの本質はま

ことである。

上述の論に於て、すべてに素人である論者は、多くの深き哲学上の問題を哲学することなしに飛躍して来た。しかしここでは哲学そのものが問題の主題となっているのではなく、いのりを哲学せんとすることが問題であったが故に、これらの飛躍はひとまずゆるされると思う。なお祈りの本質論としても本論はなお序説たるに過ぎない。後日の研究に俟(ま)たねばならぬところが多い。但し骨子に於てはあやまりなきものと信じている。

いのりが此くの如く人格の根底的要素である限り、人格者がいのちすることはいのることであらねばならぬ。誠に生くることは祈ることである。人生は祈りである！

独乙詩人フリードリヒ・リュッケルトの「婆羅門(ばらもん)の智慧」と云う長詩の中に次の如きがある。

「この世にて人のなし得るこよなき善は、
自己を出で世を出でて天に祈ることに在り。
言語(ことば)のみ祈りたるべきにあらず、
思念(おもい)もまた祈りたるべきなるぞ。
行為(わざ)もまた祈りとなるべきぞかし、
生涯が一つの気息(いき)となりて潔(きよ)く立ち昇らんがため。」

"Nichts Bessres kann der Mensch hienieden thun, als treten
Aus sich und aus der Welt und auf zum Himmel beten.
Es sollen ein Gebet die Worte nicht allein,
Es sollen ein Gebet auch die Gedanken sein,
Es sollen ein Gebet die Werke werden auch,
Damit das Leben rein aufgeh' in einen Hauch."

——Aus "der Weisheit des Brahmanen" von Friedrich Rückert.

然り、誠に然りである。然らば此くあらんがためには、いのりは如何なる本体に拠るべきであるか、また人生のみが祈りであるのか、などの問題については後にまとめて考えて見たいと思う。

〔文庫編者註：本篇は著作集第3巻『無の神学』／第二部「無の神学への道」／第一章「祈りの宗教哲学」に加筆収録されている。〕

ヒルティー原著

「眠りなき夜のため」上巻（2）

Carl Hilty：Für schlaflose Nächte, 1.Teil, 1919.

〔この圏点は原文にて強められたるところ。
また、この圏点は訳者の強めたるところ〕

11月5日

信仰について非常に多くの書類が書かれていることを私は知っている。けれども信仰について言われた者にして、ヘブル書第10章35節～39節及び輝かしき第11章が含む内容にも優して勝れたものはかつてなかったのである。

「35**されば大なる報を受くべき汝らの確信を投げすつな。** 36**なんじら神の御意を行いて約束のものを受けん為に必要なるは忍耐なり。** 37『**いま暫くせば、来るべき者きたらん、遅からじ。** 38**我に属ける義人は、信仰によりて活くべし。＊もし退かば、わが心これを喜ばじ**』39**然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、霊魂を得るに至る信仰を保つ者なり。**

1**それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。**」（ヘブル10・35～11・1）

〔訳者註〕原文には聖書引用箇所のみ記してあるけれども、出来得る限り聖句を記入せんとおもう。

＊神は「退くな」とは言い給わず、「退かば、わが心これを喜ばじ」と言い給う。おしせまる強要ではなくして、人の心を尊重し給うお言葉である。ここに神の旨に順わんとする我らの心をいかに自由なる心として神がよろこび給うかが伺われるのである。立ちて神の道に往かん哉！　忍耐を以て終りまで戦わん哉！　アーメン。

この確き信頼を有ち如何なる事情のもとにも動かざる勇者と、見得るものを信じそれに従って身を処する智者との間には今日もなお大なる差異がある。信仰の外には一つとして全く満足し得る道なしと一たび暁ってしまえば、その人の信仰は堅くなってくる。

11月18日

吾人は吾人の内的の真生命を費やすことなくして外的の敵から脱することは出来ないのである。基督の召団の有力なる一員となり始むるや、敵は却って増してくるものである。それ故に吾人は勇気と内的平和とを求めねばならない。その他のすべてのものは吾人に何ら助けとならないのである。

この勇気と内的平和にとっての力と云うものはしばしば非常に明白に吾人のものでは全

くあり得ないところの或る霊〔聖霊〕から与えられるのであると云うことは、啻に大なる慰藉であるのみならず、見えざるものへの信仰を強むるものである。かくて吾人は不幸の真っただ中にあってすらいわゆる幸福に於けるよりも幸であり歓びであることはしばしばである。これこそは見えざる世界の実在に対する真正にして論駁し得ざる証明である。

11月19日

⑴神に仕えると云う事は、彼の存在のあらゆる瞬間に於てそのすべての力と手段とを神の意思の成就のために用うると云うことである。かくの如き生活、而して唯かくの如き生活のみが決して曇ることなき清澄を与えるものである。神に仕えてかくの如き生活の歓びを歓ばんためにこそ我々は召されて人となっているのである。その他の⑵「神奉仕」は大して我々の益とはならない。そしてそんなものに対しては神もまた確かに歓びを有ち給わない。

⑴ Gott dienen。　⑵ Gottesdienst。

11月22日

神の恩恵から生ずる凡ゆる⑴高揚には必ずこれに先立つところの人間からの屈辱と侮蔑がある。このことは全く確かな⑵徴候である。凡そ人は彼が有するところの意義が人間の善き意思もしくは悪しき意思によって与えられているのではなくして、神の摂理によって付与されていると云うことを明らかに知らねばならない。そしてそれに従って行動すべきである。

かくの如き高揚はそれ故に人を謙遜にこそすれ、傲慢にはしないのである。そしてそのような屈辱〔中傷、侮蔑〕は人を堅く信頼深くするのである。これはこの世の普通の往き方とは全然正反対なものである。〔アーメン、アーメン！〕

⑴ Erhöhung。　⑵ Anzeichen。

ミカ書7・8～10、

「8**我が敵人よ我につきて喜ぶなかれ。我仆るれば興きあがる。幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう。** 9**エホバわが訴訟を理し我がために審判をおこないたもうまで我は忍びてその忿怒をこうむらん。其は我これに罪を得たればなり。エホバついに我を光明に携えいだし給わん。而して我エホバの正義を見ん。** 10**わが敵これを見ん。汝の神エホバは何処におるやと我に言える者恥辱をこうむらん。我かれを目に見るべし。彼は街衢の泥のごとくに踏みつけらるべし」（ミカ7・8～10）**

〔ミカ書のこの聖句が訳者を慰めしこと幾度ぞや！　ヒルティーは本当に適切なところを引用している。ヨブ記第16章19～20節とミカ書第7章7～9節の五節ほどある過去の事件に対して私を慰め力づけてくれたものはなかった！

聖書はわが味方！　神はわが力、わが友！　アーメン。ミカ書7・7には曰く、「7我はエホバを仰ぎ望み我を救う神を望み俟つ。我が神われに聴きたもうべし」」

ゼパニヤ書2・3、

「3すべてエホバの律法を行う斯地の遜るものよ、汝等エホバを求め公義を求め謙遜を求めよ。然すれば汝等エホバの忿怒の日に或は匿さるることあらん」(ゼパニヤ2・3)

ハバクク2・4、2・20、

「4視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず、然ど義しき者はその信仰によりて活くべし。……20然りといえどもエホバはその聖殿に在ますぞかし。全地その御前に黙すべし。」(ハバクク2・4、2・20)

ハバクク3・16〜19、

「16我聞きて腸を断つ、我唇その声によりて震う、腐朽わが骨に入り我下体わななく。其は我患難の日の来るを待てばなり。其時には即ち此民に攻め寄する者ありて之に押し逼らん。17その時には無花果の樹は花咲かず、葡萄の樹には果ならず、橄欖の樹の産は空くなり、田圃は食糧を出さず、圏には羊絶え小屋には牛なかるべし。18然ながら我はエホバによりて楽しみ、わが拯救の神によりて喜ばん。19主エホバは我力にして我足を鹿の如くならしめ、我をして我高き処を歩ましめ給う。伶長これを我琴にあわすべし。」(ハバクク3・16〜19)

エゼキエル34・24〜27、

「24我エホバかれらの神とならん。吾僕ダビデかれらの中に君たるべし。我エホバこれを言う。

25我かれらと平和の契約を結び、国の中より悪き獣を滅し絶つべし。彼らすなわち安らかに野に住み森に眠らん。26我彼らおよび吾山の周囲の処々に福祉を下し、時に随いて雨を降らしめん。是すなわち福祉の雨なるべし。27野の樹はその実を結び、地はその産物を出さん。彼等は安然にその国にあるべし。我がかれらの軛を砕き、彼らをその僕となせる人の手より救いいだす時に彼等は我のエホバなるを知るべし。」(エゼキエル34・24〜27)

イザヤ43・11〜13、

「11ただ我のみ我はエホバなり。われの外にすくう者あることなし。12われ前につげまた救をほどこし、また此事をきかせたり。汝等のうちには他神なかりき。なんじらはわが証人なり。我は神なり。これエホバ宣給るなり。13今よりわれは主なり、わが手より救いいだし得るものなし。われ行わば誰かと

どむることを得んや。」(イザヤ43・11〜13)

イザヤ46・11、

「11われ東より鷲をまねき遠国よりわが定めおける人をまねかん。我このことを語りたれば必ず来らすべし。我このことを謀りたればかならず成すべし。」(イザヤ46・11)

11月28日

仕事に際しては、いつも先ず第一に最も必須なることをせよ。而もそれに元気よく主眼を捉えて着手せよ。斯くすることは多くの事に時間を有つための手段である。これとほとんど同様によき第二の手段は、あらゆる不必要な仕事や努力を避けることである。

更にまた生涯に於て然るべき期に、娯楽とか社交的義務とか称せられるところの極めて不必要なことを抛擲することが出来るならば、過度に骨折ったりすることもなくまた健康もよく保ち得て、普通の仕事の量の二倍三倍を荷うことが出来る。

11月29日

征服、人生に於てあらゆる善ならざること、美あらざることに対して勝利者であると云うことは、人生の本当の合言葉である。これはしかし万事を軽視し、或いは戦いを出来るだけ逃遁したり糊塗したり、或いは終いには(1)ストア的〔冷静なる〕無関心(アタラクシー)を以て頭を垂れて敵人に路の全幅を開けてやると云うようなことを意味するものではない。否! そは神が戦士に与えんとし給う力によって闘い而して後「すべてを嬴ち得る(嗣ぐ)」の謂である。

(1) stoische Ataraxie = stoische Leidenschaftlosigkeit

ヨハネ黙示録3・12、

「12われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、すなわち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを書き記さん。」(黙示録3・12)

ヨハネ黙示録21・7〜8、

「7勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。8されど臆するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、人を殺すもの、淫行のもの、呪術をなすもの、偶像を拝する者および凡て偽る者は、火と硫黄との燃ゆる池にて其の報を受くべし、これ第二の死なり』(黙示録21・7〜8)

正に一つの成長であるところの内的成長には忍耐が要る。そして加之この成長の何れの部分もその充分なる時を要する。而も戦いは、それにも拘らず、空想が想う如くにいつも継続してあると云うわけではない。むしろ美しきヘブル書に言われている如く、地上に於

て既に「神の民には安息が現存」し、そして「彼の安息に入ったものは、神がその業から休み給いし如くに、その業から休むのである」。

「9**然れば神の民の為になお安息は遺れり。10既に神の休に入りたる者は、神のその業を休み給いしごとく、己が業を休めり。**」（ヘブル４・９～10）

＊

「星のたより」（2）

「わが兄の『村の鍛冶屋』の絵」

「一日をロングフェローと」（“A Day with Longfellow”）と云う薄い本に挿画が数葉ある。その一つに「鍛冶屋」のがある。それを切りとって兄は小さな額にして書斎の柱に懸けた。長きつきひ兄と私はその室に机を並べて暮らした。期が来て兄は北京へ往った。兄は再び帰って来なかった。私は寂しく残された。「鍛冶屋」を室の留守番にして上京し、秋に帰省してみると彼の姿が見えない。その時の私の失望！　盗人は何者であったか。

ああ、わが「鍛冶屋」の盗人よ、君も人間だ、私の兄弟だ。もう盗んだなどと思うな、私から貰ったと思ってくれ。そして「鍛冶屋」を愛してくれ、私の兄がそれを愛したように！その絵がささやく声を聴くときに君も共に聖名を讃えてくれよう！

＊

（其3）

「村の鍛冶屋」——ロングフェロー——

Longfellow：“The Village Blacksmith”

Under a spreading chestnut-tree　枝を拡げた栗の樹かげに
The village smithy stands;　村の鍛冶屋の家がある。
The smith, a mighty man is he,　鍛冶屋はいとも健き男、
With large and sinewy hands;　両手は大きく筋ばっている。
And the muscles of his brawny arms　その逞しい腕の筋肉は
Are strong as iron bands.　強くて鉄の帯のようだ。

His hair is crisp, and black, and long,　その頭髪は波立ち、黒くまた長く、
His face is like the tan;　その顔は樹の皮のようだ。
His brow is wet with honest sweat,　その額はまめなる汗で濡れ、
He earns whate'er he can,　彼の得るところは己が力によるものばかり、
And looks the whole world in the face,　世をすべてまともに彼は見る、
For he owes not any man.　何人にも彼は負わぬから。

Week in, week out, from morn till night,　一週また一週、朝から宵まで
You can hear his bellows blow;　彼の鞴の吹くのが聞こえる。
You can hear him swing his heavy sledge,　彼のうち振る大鎚がひびく、
With measured beat and slow,　おちついたリズムで打っている、
Like a sexton ringing the village bell,　それは夕陽が低くなったとき
When the evening sun is low.　寺男の打つ村の鐘のように。

And children coming home from school　子らは学んで家への帰るさに
Look in at the open door;　開いた戸口で覗き込む。
They love to see the flaming forge,　彼らは炎える炉が見たく、
And hear the bellows roar,　また鞴の唸りが聴きたいのだ、
And catch the burning sparks that fly　打たれる根太から飛ぶ籾殻のように、
Like chaff from a threshing-floor.　散る火の子を捉えたいのだ。

He goes on Sunday to the church,　日曜には教会に彼はゆき、
And sits among his boys;　彼の男らに雑って坐る。
He hears the parson pray and preach,　牧師が祈りまた語るのを聞き、
He hears his daughter's voice,　また村の唱歌隊の中に
Singing in the village choir,　唱う彼の娘の声を聞き、
And it makes his heart rejoice.　彼の心はそれを欣ぶ。

It sounds to him like her mother's voice,　それはパラダイスに唱う
Singing in Paradise!　彼女の母の声とひびく、
He needs must think of her once more,　彼は思わざるを得ぬ
How in the grave she lies;　彼女はどうしているのだろうと。
And with his hard, rough hand he wipes　その強い疎い手で彼は拭う
A tear out of his eyes.　彼の目から涙一つを。

ファイル名：PDF 小池蒜　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24
制作・著作：HP「小池辰雄文庫」

Toiling,–rejoicing,–sorrowing,
Onward through life he goes;
Each morning sees some task begin,
Each evening sees it close
Something attempted, something done,
Has earned a night's repose.

Thanks, thanks to thee, my worthy friend,
For the lesson thou hast taught!
Thus at the flaming forge of life
Our fortunes must be wrought;
Thus on its sounding anvil shaped
Each burning deed and thought.

労きながら――歓びながら――悲しみもして
彼は人生を前みゆく。
晨ごとに何ごとか始められ、
夕にはその終るのを見る。
何ごとか企てられ、何ごとか果たされて
一夜の眠りを彼は贏ち得る

有難う、有難う、わが貴い友よ、
汝はよきことを教えてくれた！
斯く人生の炎ゆる炉で
われらは鍛えらるべきだ。
斯く人生の鳴る鉄床でつくられるのだ
燃ゆるが如き業と思想は！

――11月17日晨訳す

＊

中学時代に愛誦した詩である。最後の二節、就中最後から二節目が好きである。信頼の平凡な生活であるが、此くの如きが基督者生活の基調であろう。神の眼に嘉せられるのはかく正直にその日その日を働く人であろう。詩としてはこの節で終ってよかったのであろう。しかし現実にかかる鍛冶屋を見た詩人にとっては、このガヂヤさんに一言心からの感謝の意を表わさざるを得ざる気持になって、最後の一節が付加されたのだろう。「サンクス、サンクス」である！

制作・著作： HP「小池辰雄文庫」

ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24

「樅の日記」（2）

○1918年11月24日（つづき）

――星を学ぶは何のため――

中学二年の弟、

「大きい兄さん！　星座がわかると何時頃だか時間がわかっていいのね」

大学二年の兄、

「だけれど、辰さん！　時間を知るために星を学ぶのじゃないんだよ、……」

兄の言は余韻をのこして断(き)れた。弟はその先を問い得なかった。

二人は夕闇を歩きながら話題を多分、一高対三高の野球戦にとりつつ家路を急いだ。

幾年か経て、弟がその先を知ったとき、兄は地には居なかった。

真理はしばしば説明されないのが最善の道であることを学んだ。

＊

○1918年11月24日

〔圏点は編者の付加したるもの
〔　〕符はすべて編者のもの〕

腓書〔ピレモン書〕は短い一書簡である。原文のギリシア語にすれば337文字（?）とかにすぎない。仮名混じりの日本訳にしても約一頁をうずむる字数である。25節より成る、繰り返すが単なる一書簡にすぎぬ。その内容はといえば、ローマ書の如き、コリント後書の如き、或いは人の救わるるは義〔人の〕ために非ず、信仰に依るといい、或いは人の復活を説く壮美は無い。一見したるところオネシモなる一奴隷をその不義をなして逃げ来れる旧主フィリーモンにポーロが侘状を書いているにすぎない。

この小なる事に関する短い書簡はその小と短との故を以て聖書一部神言論者にとっては聖書全部神言論者に対する非難の最もよき中心点であった。これが神の言であるか、これが聖書の中にある可(べ)き書であるか、これが果たしてポーロの書であるか。

誠に腓書がポーロの書なりや否やは大問題である。いわゆる高等批評家はいう、ポーロの名を以て呼ばるる書13冊を数うるけれども、確かにポーロの書を以て目すべきものはローマ書、コリント書、ガラテヤ書の4冊にとどまる。ピリピ書、エペソ書、コロサイ書は何れとも見られるが、まずポーロの書にあらずとするを妥当とする。ピレモン書は如何。ピレモン書、もしポーロの書となさばピリピ、コロサイ、エペソ、またポーロの書たらざるを得ないと。誠に腓利門は要(かなめ)であるので、これがポーロのものと認められれば、聖書の中

のポーロの名を冠しつつ実に於てもポーロの書なるものの数は増すのである。

この故にポーロの書として腓利門を活かす可きか然らずして殺すべきかは激しくあらそわれた。涙を流して腓利門を殺した人はあった。エペソ、コロサイ、ピリピを殺して来た論理上の必要から腓利門を殺した学者も少なく無かった。

しかしながら、Sabatier（サバティーア）にはこの事は出来なかった。彼には流れ出づる涙にまぎらされて腓利門書を斬る不明なる良心と学識とはなかった。彼は断乎として腓利門書を助けた。そのポーロの書たる所以を弁護した。彼は腓利門を助けると同時にエペソ、ピリピ、コロサイ等も救ったのである。ポーロを活かしたのである。

〔高等批評が〕百歩を譲ってよしピレモンを以てポーロの書なりとするとも、いわゆる高等批評は何故にポーロのこの書簡を以て神の言となすやというであろう。誠にここには一見ローマ書、コリント書の偉大はない如くである。しかし果たしてそうであるか。

我等はピレモン書自身をして説明せしめようと欲する。

ポーロはローマに居る。今囚われの身であるそのクリストの囚人たるパウロという所に彼の篤い信仰と〔この世ならぬ〕幸福とがある。10節に於ても

「囚人（めしうど）となれる我パウロ、繩目（なわめ）の中にて云々」

と云っているのを見てもローマなる牢獄、少なくとも監視されたる裡（うち）よりこの温かき手紙を書いている事は明らかである。手紙の受取手はコロサイなるピレモン、その妻アピア及びその息子アルキポである（ピレモン書1・1、コロサイ書4・17）。「我らが愛する同労者、我らの愛する姉妹」と云うを見れば、よき信仰の間柄であったのであろう。夫妻共にパウロに従い、息子も従い、その家に教会を開き得しを思えばピレモンは幸な男であったといわねばならない。

ポーロもそう思う。その故に彼はいう、

“4 Ich danke meinem Gott und gedenke allezeit an dich in meinen Gebeten, 5 weil ich von deinem Glauben höre, den du an den Herrn Jesus hast, und von deiner Liebe gegenüber allen Heiligen,”

「4われ祈るとき常に汝をおぼえて我が神に感謝す。5これ主イエスと凡ての聖徒とに対する汝の愛と信仰とを聞きたればなり。」（ピレモン1・4～5）

「主イエスと凡ての聖徒とに対する汝の信仰と愛」と云うのが難解とせられる。この故に詳言すれば「聖徒に対する信仰」と云うのが変であるが故に、理解し難きが故に、或いはこれをコロサイ書1・4の如くに、

“4 da wir gehört haben von eurem Glauben an Christus Jesus und von eurer Liebe zu allen Heiligen,”

「4これキリスト・イエスを信ずる汝らの信仰と、凡ての聖徒に対する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。」（コロサイ1・4）

と解するものがある。なるほどコロサイ書とピレモン書とは恐らく同日同時間の中に書かれたものであるから両者中の似よった文句を同様に解せんとする一理なしとしない。しかしながら、コロサイ書はコロサイ人に一般に当てられ、ピレモン書はピレモンに当てらる。前者は動揺せんとする一地方に対する公の文であり、後者は友人親友に対する書簡である。両者の間にこれだけの差あるが故に両書に著われて来る同様文字にも異なった意味なしとする事は出来ない。殊に恐らくは同一時間の中に書かれたりとの一事は却って両者の異なれる意義を暗示するものと見る可きではないのであろうか。然らば聖徒に対する信仰とは何であるか。信仰の友に対する信仰とは何であるか。友だちとの干渉は愛情によって成るがそれだけでは足りない。理解に於て堅くせられる。がなお不充分である。信仰によりて完成せられねばならないのである。君は君の友だちを愛し解すると同時に彼の中なる神を信仰せねばならない。自分の中の神を信じてくれる友人あらば何人の中傷者が表われ何年の誤解がわだかまらんとするともその友人との間は安全である。ピレモンには神に対すると共に友に対してこの信仰があった。直接に神を瞻視すると同時に友人の中の彼を見得た。

また曰く、

“6 damit deine Gemeinschaft in Hinblick auf den Glauben für Christus Jesus wirksam werde durch die Erkenntnis all des Guten, das in euch ist.”

「6**願うところは、汝の信仰の交際の活動により、人々われらの中なる凡ての善き業を知りて、栄光をキリストに帰するに至らんことなり。**」（ピレモン1・6）

即ち、

“6 That the communication of thy faith may become effectual by the acknowledging of every good thing which is in you in Christ Jesus.”

内なる信仰が外に表われて行為となる。行為の善なる部分を悉く神の栄光に帰し奉るによって信仰はますます強くなるのである。ルッター〔ルーテルの正しい発音〕曰く、

「もし内に信仰の燃ゆるあらば必ず告白あらん。もし告白あらば必ずや十字架の患みあらん。もし十字架の患みあらば必ず栄冠の慰めあらん。信仰と告白と艱難とは相関関係にあり。」〔「これらはよき基督者の責務なり」となお付加してある。――編者〕

と。

内なる信仰よ、外に出でよ、外に出でて彼の御名を讃め奉れ。パウロはかく叫んだのである。誠にお前の事は思うだに愉快である、また慰めの本源である、と云う。

さて本題に這入って曰く、実はお前に頼みが一つある。外でもないオレシモの事である。お前がクリストを信じ凡ての善を彼に帰し奉る事を知るが故に、こうせよと命令する事も出来ると思うけれども、命令よりはお前の愛の心に訴えたいと思う。外でもないオレシモ

の事である。オレシモは我がローマの縲紲(なわめ)中に得た子供達の一人である。さきにはお前に対してはオネシモはその名にそむいて「益なき者」であったが今は正に反対である。お前にも益ある者となったが自分にも益ある者である。今彼を帰す。請う、受けよ、彼はわが友である。我が信仰の友である。否、我が心である。思え、パウロはダマスコに育ちたりと雖も彼はローマ市民である。オネシモは如何。オネシモ、クリストの御名を称うと雖も、そのローマ帝国に於ける身分は一介の奴隷にすぎない。その頭をかかえてオネシモはわが心なりと云うパウロの心を思え。しかもそれがすぐ前にはコロサイ書に於てクリスト万有中心論を称え、

「15**彼は見得べからざる神の像(かたち)にして、万(よろず)の造られし物の先に生れ給える者なり。16万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるいは支配、あるいは政治、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。」（コロサイ1・15～16）**

と云いし同じ人の同じ時の口により、オネシモは我が心なりと云う言の出でしを思う時、パウロの人格は我が前に明白に表われて来るのである。温かき心よ、温かき心よ。

コレリッジは、

「余に於ては一人の小児と雖もまた大いに一個の宇宙である」

と云った。アマスト大学のシーリー先生は内村先生のために祈られた。一つの宇宙、彼のために作られ、彼の手によりて作られしを思う時、彼のため彼の手によりて作られし自分も全く同じ心同じ情とならざるを得ない。本当の自由といい平等というはここに於て得られ達せられ得べきものである。

パウロはいう。彼は我が心である。我が所に留めておいて汝の代わりとして一緒に働いて貰いたく思う。けれども事後承諾はいやである。心から承知して貰った後でなければ自分の下で働いて貰い得ない。お前の下に居たたまれぬ彼を自分が許すのはお前に不信な行為になる。遠いけれども一度はオネシモはお前の下に帰す。

ローマよりコロサイまでおそらくは三十日余の旅路であろう。一本の手紙を以てオネシモの後悔せる事、改悛せる事を知らさばパウロはそのままオネシモを使っていていいというかも知れない。しかしそうではない。義理堅きは尊ぶべきパウロの心である。友情というものは礼儀と矛盾しない。正当な手続きを離れては善悪に限らず意思は徹(とお)らぬ。尊き友情のためには、よし一年の旅行と雖もさせねばならない。

高等学校入学という事実を以て過去は過去と葬るわけには行かない。一年の失敗、二年の失敗は一年二年共にそれぞれ決着を厳格につけてから三年目の受験にかからねばならない。

パウロの心は堅かった。ある人がこの夜のオネシモとパウロとの問答が記録せられざるをうらむと云った。誠にその通りである。或はオネシモは面倒すぎる馬鹿丁寧だという声

を聞いたかも知れない。面目ない旧主に会わせるだけは許して下さいと頼んだかも知れない。パウロは諄々と説いてどうしても行って来ねばならぬ所以を釈明したことであろう。

しかしながら、パウロには単にオネシモにのみ心をとめて他を顧みないのではなかった。ピレモンに対してもまた彼の真情と雄弁とを以て迫る彼は言う。

なるほどオネシモはお前の許を逃げ出してローマへ来たのであった。しかしローマに於て彼は神の御声を聞いたのである。神はその御声をオネシモに聞かしめ給わんがためにオネシモをお前の許より取り給うたのではなかろうか。お前のもとより奴隷としての彼をとり去り給い、心霊上自由なる彼をまたお前に与え給わんと計画さたのではなかったのだろうか。誠に主の御声をありのままに聞くものは即ち最も自由な者である。誰が自由を有するともこれより自由なるものはない。自己の意思に於て自己に制限を加え得るこれを自由というとはカントの自由に関する意見である。身心の軽薄なる放姿等を自由というに比すればカントの見解遥かに大胆且つ雄なりと雖も、直接に神を聞き得る者、これを自由というは遥かにその上の信仰を含んでいる。何人をもしてこの意義に於て自由たらしめ給え。

今やオネシモはこの自由を享け得たのである。奴隷の心は彼にない。彼の心は兄弟の心である。その心を得しむるために神は彼にこの悲しき旅をせしめ給いしものである。自分は特に彼を愛する。お前も社会上彼の主人たる身分に於ても、また信仰上同じ神の御名を讃美すると云う意味から云っても彼を充分愛する事であろう。もし私を友として待ってくれるならば、同じ心、同じ態度を以て彼に対してくれ。

もし不義理なことをしてお前に迷惑を懸けているならば、それは唯にポーロ、この部分自ら書くポーロの負債としてくれ。

お前だからいうが、お前は自分に対して比ぶべからざる恩を蒙っているものではなかろうか。だが、まぁそんな事は言わない。願う所はクリストの御名に於て自分が慰めて貰いたい事である。しかしそれは安心している。お前はきっと自分がたのんだ以上をしてくれる事であろう。

それから自分のために泊まりの用意を頼みたい。お前達の祈りの聞かれて訪問す可き日の近づくのを覚える。訪問の暁には恐らくは我等の愛する兄弟オネシモの健全なるを見る事が出来るのであろう。

友情に訴え、理に訴え、義理に訴うパウロにはオネシモのために彼の全力をつくしまたピレモンのために彼の全注意を払って居る。一人の人間が既に宇宙ならば二人の人間の関係は大いなる二つの宇宙の関係である。自己に近き二個の宇宙が正に衝突したるを見てパウロは黙する事を得なかったのである。彼の心は親切と礼儀とに満ちたのである。

最後にイエス・キリストの恵み汝らの霊と共にあらんことを祈る。物的に不足なき人のために祈るべきは霊のめぐまるることであらねばならぬ。短しと雖もこれが腓利門書である。

ここに贖罪論なく、宇宙論なく、死生論なく、信仰論なしと雖も、ここに友情と愛すべき自由と憐憫(あわれみ)がある。偉大なるパウロにはこの二方面が必要であったのである。誰かこれをパウロの書としての存在を疑うものがあるか。また誰かこれが聖書より抹殺す可きものと認むるものがあろうか。

誠にルッターは言った、我等は神のオネシモであると。神のオネシモ、神のオネシモ、主の許を不義を以て逃れたる我等に対して斡旋の労と親切とをとらるるものは我が主クリストである。

神のオネシモよ、神のオネシモよ、喜びと希望とを以てフィリーモンの下(もと)に行かん哉。

＊

「夕の所感」

一昨年の晩秋、昭和医専校友会誌に投稿せしもの。彼らの魂は塵につくのみか、今秋は彼らのために執筆する勇気を失いたるが如し。

動かぬ筆は何日になっても動かない。しかし書くと一言応えたからにはその前言を翻したくない。何を書こうかと考えていたが、漠然たる理念(おもい)が起こっては霧と散るのみである。独詩を訳してみようかと古いのを覆(ひっくり)かえしているうちに翻訳の意図はいつしか繙読(はんどく)の自適に移り、午後の陽は速くもその馳場を走り尽くして井ノ頭の森のかなたに春(うすづ)こうとしていた。落日の景は珍しきものではないが、私には観るごとに新たである。一種の驚異と霊感である。詩の世界から自然に眼(まなこ)を転じたときに今更の如く後者の偉大を覚えた。空の鳥は落ちゆく陽を趁(お)いながら何を思っているかを知らない。一日路の照明を終えて沈みゆく陽が息吹く言を私は聞く。その余韻はながく昏冥(たそがれ)の空に響く。

「この日ことばをかの日につたえ
この夜知識をかの夜におくる、
語らずいわずその声きこえざるに、
そのひびきは全地にあまねく
そのことばは地のはてにまでおよぶ。」（詩篇19・2～4）

斯くいみじくも詠(うた)いしユダヤ詩人の心が伺われる。神秘者の耳は却ってその声を聴かぬであろう。自然は誠に詩より偉大なる詩であり、教訓より偉大なる教訓である。静かに自ら味わう人はこの言い古されたる言に新しきものを感ずるであろう。

凡そ真理は何にてもあれ、自らに体験せられざる限りその人にとって真理たるを得ない。

真理は人に感得せられるのを待っている。自ら新たに真理を感得したときはその人にとっては即ち発見である。されば真理の発見とは天才独占の業ではなく、万人に委ねられたる日毎の義務であり歓びであらねばならぬ。人にあらざるものは食物を糧として生くるのが存在の意義をなすのでもあろう。しかしながら、人に於ては真理を糧とするに非ずんばその人格的存在の意義を有ち得ない。

夕映の美、須臾にして消ゆるものながらそこには永遠のゆかしさがある。永遠！　何たる厳かなまた快き想いではないか。日夜眼前の事物に拘り、起臥都会の喧騒に煩わさるる我ら少しく眼を上に向け心を永遠に馳すべきではなかろうか。私は悲しむ、現代青年の思念のあまりに地に伏し塵に著けるを。

「犬猿をして現在を択らしめよ、人には永遠ぞある。」

と唱えたるブラウニングの気魄を有とうではないか。その心根に永遠に即せんとする何ものかがあるならば、真に現在を生くることが可能となって来よう。

我々は殷鑑を遠きにありとはしない。この間試験があった。何人の心の池も一種の波紋を意識的にか無意識的にか生じないでは済まなかったであろう。その鈴の音を寺の晩鐘とのどかに聞いたものもあるまい。私は鬼ではないから諸君の文字通りの異常なる面持を見て同情した。しかし室の中を二、三の灯台が歩き廻らねばならぬ所以のものは何であろうか。諸君の眼は暗いのであるか。一人一人がわれは監督さるるを要せずと心底より断言することの出来る青年ではないのか。私はすべてが光の子である理想境を描いて現実に立ち帰ったとき黙然たらざるを得なかった。窓外に蒼穹を浮遊する白雲が人の心の汚濁をあわれむと見えた。

無論私自身諸君を責め得る人間では毛頭ない。しかし私の衷に点ぜられたる炎が義に燃える。私は已むを得ずして叫ぶ。しかし秘かに。もし私が叫ばないならば、石が路傍に呪うであろう。答案を書きながら空を仰いで永遠を念えと誰が要求しよう。しかしながら己がベストを尽くし成績の如何を問わず、席次の如何を念とせざる心の淵はかの蒼き淵と相応のものではないか。かの木の葉の一ひら一ひらは根幹なくしては緑なるを得ない、その如く答案に現わるるところは諸君の有つありのままのものであるはずである。不勉強であったならば男らしく自ら蒔きしその種子の果を刈りとるべきでないか。悪念が湧いたならば静かに冥想する余裕を有とうではないか。人格的存在たるを自覚するときその尊厳の正に空の無限、時の永遠に比すべきを知るではないか。

人格観念の稀薄なるは罪観念の欠如に基づく。また義を慕わざる心はやがて不義を悪まざる心である。弱者の虐げられ、義者の迫害せられ、預言者の貴まれざるは人の世の常であるが、静かに己が胸懐を顧みるとき何人も驚くべき事実に戦慄するであろう。即ちここには良心が何度蹂躙され、その炎は魔の風に吹き消され、その声は甘き囁きに欺かれたか。焉んぞ知らん、現世の縮図を己が一身に観んとは。

私はここに罪の何たるか、良心の何たるかを論じようとはしない。ただ試験を真に人格的に正しく受けると云うこの一事の中にいかなる真理が含まれているかを暗示しなければならなかったのである。宝玉は貴くあろう。しかし一義念は限りなく貴い。功利的打算的観念を悪みて、善意思を己れ自体無限に善なりと貴むことをかの哲人と共に学ぼうではないか。難しい哲理ではあるまい。純真なる心はおのずから首肯するであろう。

真善美を絶対の相に見出さんと求むる魂は永遠の実在を慕う。永遠なるものをして感情の憧憬の対象とせず、全存在の希望の対象たらしめよ。憧憬は深き夢であるが、希望は確き信である。かくて魂をして永遠の世界にその坐を据えしむるならば、我々の生活態度に大なる転向が起こるであろう。真理思慕の念は泉の如くおのずから湧くであろう。すべて虚しきことを厭うに至るであろう。不純なることに堪え難くなるであろう。魂は暫時的、相対的なるものに安らうことは出来ぬはずである。然るにその魂をして物質的満足及び快楽に暫時的安息を求めて顧みるところなきが如きは、水溜をみて泉水となすより大なる迷妄である。

私の筆はこれより先へ進もうとしない。私の思念のみが動いている。そは＊声なき歌となって晩秋の星空に昇ろうとする。

＊祈りのこと

＊

11 その神を神にあらざる者に易たる国ありや。
然るに我民はその栄を益なき物にかえたり。
12 天よこの事を驚け慄けいたく怖れよとエホバいいたもう。
13 蓋わが民はふたつの悪事をなせり。
即ち活ける水の源なる我をすて自己水溜を掘れり。
すなわち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり。

――エレミヤ2・11～13

「みどり葉」（2）

残樅〔辰雄〕

「うたの心」

うたはみだりに作られるはずのものではない。浮いた心の即興に成るものでもなければ、閑人のすさびごとでもない。

一念凝ってしずかに迸り出づるところにうたは成るのであろう。人格の吹息であり、情意の一鼓動である。短きながらに、人格の中核を何らかの意味において投影していなければならない。単なる感情の産では断じてなく、いのちある情意が動いていなければならぬと思う。澄みきった智（認識）はこれが衣であろう。しかも神の前に謙虚なるいのりの心こそはうたの心の母胎であると思う。純なる情意はうたの生命であるからである。私は斯かる態度でなければものすまじと意（おも）う。

＊

1927年〔5年前のもの、多少加筆せり〕

25　北天の星をのぞみて影二つそのかみしのびし前夜かな。

——12月24日、佐藤兄と我

26　満天の星いただきて灌木の林のかげにわれらいのれり。

——同上

27　大鷲のひとり翔けゆく天つ路はきびしく辛くも雄大ならん。

——暮のある日

28　「ヨハネ号」読みゆくうちに人しれず涙ぞ流る新町の丘。

——6月5日

29　来るたびに心は新たに躍るかな富士の高峯の東海の浜

——夏、沼津にて

30　エジプトのピラミッドかと大宮の変化（へんげ）の富士にわれあやしめり。

——8月2日夕、大宮口にて

31　磯に立ち六年（むとせ）の昔を偲ぶれば想いはるけく空に飛ぶ。

——7月31日、千本湊にて

1928年〔4年前にものせしもの、多少加筆す〕

32 いざさらばわが友行けよいさぎよくすべてを彼にまかせまつりて。
——1月6日、佐藤兄のため

33 信仰のよき戦を戦いて我ら斃れん主の足もとに。
——同上

34 世の人と悦ぶふしは異なれど人の幸(さち)をば彼はねがいき。
——1月20日、わが樅を想いて

35 陽の高き真昼の空に昇りゆきし若人(わこうど)は今何をなすらん。
——1月20日、樅を想いて

36 「カント号」水茎の跡は変わらねど光の源(もと)はいたつきの床。
——5月、先生の「旧約と新約」

37 流れたる月日はすでに十四年去りにし彼女(かれ)をあわれとぞ思う。
——妹愛子を思う、召されし日、6月5日に

38 わがためか蕾の生命(いのち)ささげたる彼女の愛はわがうちに生く。
——同上、6月5日

39 わが旅路(たび)の易(かわ)らぬ友は新町の丘にて見たる詩(うた)の世の星。
——6月17日、新町のダンテ終る

40 論文はシルレルの詩と定めたり成るも成らぬもなわずらいそ。
——6月、大学卒業論文のこと

41 乙女子は地震(ない)はいかほど怒るとも父兄(ちちあに)の死ゆえ動かじと曰う。
——吾妻てい子さん震災にて父と兄とを失い、地震が来ても動きたくないと云う。同情のきわみなり。7月12日

42 夜もすがらいのり給いし山中のイエスの心は神のみぞ知る。
——マタイ伝14章をよみて、7月13日

43 母らへの闇の旅路も聖(み)栄えのあがらんためぞわが心まつ。
——7月13日

44 夏の午雲脚は動く麦畠を濃緑(ふかみどり)にて染むるごとくに。
——7月25日

45 ありし日の面影しるく今日もなおわがまなかいにありありとあり。
——8月25日

46 武蔵野に生い立ちし日の樅の影雄々しくもあり寂しくもあり。
——8月25日

47 われら若し思い出に生くる人ならばすべてははかなき夢とし見えん。

１９２９年　〔多少加筆せること前に同じ〕

48　禍のこの世にありて義のために戦わずんば何の生ぞや。
　　――8月25日

49　三伏（さんぷく）の暑さも何にかみ恵のかげに憩いて古書（ふみ）よむ我は。
　　――7月11日

50　罪の波よせてはかえすこの胸の貫き通す光ある哉。
　　――8月11日

51　白鳥（シグナス）を共に仰ぎしわが兄は今や聖国の庭に見るらん。
　　――9月5日

52　しろがねの彗星を見るその昔蛍捨いにし橋のたもとに。
　　――8月19日。ツェッペリン飛行船を新宿の橋のほとに見る。
　　6才の頃、この橋に蛍をとりに来たことがあった。
　　――9月5日、白鳥は北十字とも言われる星座

53　わがためにいのりて待ちて死にし兄のよろこびは今かぎりなからん。
　　――9月15日

54　主の愛を思えばすべては春さきの小川の如く解けゆくぞかし。
　　――9月22日、樅の日に

55　主の笞（しもと）したしくこの身にくだるらむ天つ真理（まこと）を知らせばやとて。
　　――9月22日

56　彼の愛のはげましに弱きわれは去り別のわれこそいさみ立つなれ。
　　――9月22日

57　天つ幸残れる秋に深かれとねがう心に友の名いくつ。
　　――10月28日

58　美わしき人の心を映してか夕の空のこのなごやかさかな。
　　――11月26日

１９３０年

59　いやさきの光を浴びてあらたまの年を寿（ことほ）ぐ不尽（ふじ）の峯ゆかし。
　　――元旦

60　あかときにスピカの星を望み見て去年（こぞ）のこの頃を思い出づるも。
　　――1月13日

61 いたつきのみ床を守(も)りて五十度(いそたび)を昇りしわが陽(ひ)いや照りはえよ。
——先生を思いて、1月半

62 よみさしの書(ふみ)そのままに杖(つえ)をとり夕陽を追いてわれ立ち出でつ。
——1月24日

63 生い立ちて幾年経しか若き樹々の斧一振りに別るる夕。
——同上

64 たそがれのしずけさ深みゆくりなく木ぬれさわがす音のあやしき。
——同上

65 うつし世の人の心は叛きたり時ありてか聖憤(みいかり)をや呼ばん。
——1月下旬

66 わが兄の辿りし路の途絶えける峯をし今ぞまのあたり見る。
——同年輩になる

67 力なき身のほど知らにかじりつくものぐるほしさに鬼は逃ぐらめ。
——旧約原典の勉強。1月下旬

68 丘の上は今日も寂しき野の人は病みつきたまいて八十(やそ)日に余る。
——1月下旬

69 燈火(ともしび)を断たれてわれは母君のあやめもわかぬながき夜に泣く。
——停電したとき、2月22日

70 父君の病の床を訪ねんと起き立つ人はおなじく病みたり。
——先生、父子を想う。2月

71 日に一度父の見舞いをゆるされてうれしむわが師の心いたまし。
——2月

72 ふるさとの野山の中にわが友はしずけくまつらん永遠(とわ)の晨を。
——晩秋、井浪弘兄を想いて

73 師の傘に身をまもられて帰りける秋のひと夜をわれは忘れじ。
——11月30日、全集刊行相談会、洋君より
藤井先生の大きな傘をお借りして帰る

1931年

74 名にし負う沙漠の原ゆうち見ればいや白きかな山の息吹は。
——8月3日、大島三原山の煙

75 むらぎもの心のおくに湧き立つは調べもわかぬいのりなるらめ。
——9月26日

76 白煙をみ空にのぼらす火の山の心にも似たりわが胸の中。

——9月26日

77 暗黒(やみ)の夜(よ)にいずこともなく吹く風に泣く松籟の言をぞ聴く。

——9月26日

78 音もなく雪の降りしくあかときに旅立ちにけり嬰児(みどりご)の魂(たま)。

——久子ちゃん天にゆく、2月6日

79 無辜(つみなき)の心はいかでいたつきに患(なや)むべかりしわれは悲しむ。

——同上

80 小さき花茶毘の煙と立ちのぼり天つ聖国に咲き甦(か)えるらん。

——同上

81 時車(ときぐるま)めぐりて速し二十年(はたとせ)と七つを満たして進みゆくなる。

——2月7日、誕生日に

1932年

82 山かげの暮れゆく浦に揺ぐなり僚船(とも)なき舟の檣(ほばしら)の影。

——3月29日、真鶴にて

83 松の木の幹もとに腰をうち据えてわれ聖書(ふみ)よめば松籟(まつかぜ)の呼ぶ。

——4月17日、新町の松のしたにて聖書を読む

84 主(あるじ)なき片丘の辺(べ)は春寂し友寄り会いて夕陽に語る。

——5月1日

85 海越えの南の国に兄弟(とも)ありて玉ずさを賜(た)ぶ祈りによせて。

——5月7日、九州の溝手氏よりのたより

86 ひさびさにいたつきの床をわが守る春更(た)けの日に芳信(たより)うれしも。

——同上、六年振りに腹をこわしたり

87 大(おお)き兄弟(とも)のあつき情(こころ)に何をもてわれは応えん魂(たま)砕かるる。

——同上

88 いくばくも読むことなくして睡(まどろ)みといのりに送りし今日の恵みや。

——同上

89 小庭(さ)べの初もみじ葉に光さし緑滴る夕ひと時。

——同上

90 大空も陸(くが)も諸共にゆらげかし諸国(もろくに)びとの魂(たま)醒めんため。

——同上

91 乱れたる麻も愚かや今の世は夢にも知らず神さばくとは。

92　ひるさがり櫟林に立ち入りて憩う袂にそよ風の吹く。
——同上

93　小鳥なき微風吹くも緑なす櫟林の真中にあれば。
——5日15日

94　涯しなき宇宙を想えばわが魂は身を離れてか飛ぶや片時。
——同上

95　春深かき夕の光にちらちらとゆらぐ葉うらにみどりこぼるる。
——同上

96　うららなる春の日花をよそにしてもはらに審ぶ答案の跡。
——4月半、入学試験答案をしらべつつ

97　むら肝の心の美しき人ゆえにうつし世ゆかし聖名をし讃う。
——4月24日、母の教え子O夫人の心

98　あさ風のそよぐまにまに藤棚のみどり葉の端に小蔓ゆるぐも。
——5月21日

99　五月空もみじ葉は今庭のべに葉かげつくりてあおあおと萌ゆ。
——同上

100　定めなくい行けば途にゆくりなく牛立ちて居りて目を瞠らしむ。
——5月22日

101　岩かげの日暮れて黒き海づらにあやしく光る海の螢火。
——7月末、沼津の海にして夜行水母を見る

102　大帝かみ去りて二十年のこの日迎うる日の本の国は。
——7月30日

103　ほのぼのと空明けゆくに目醒むれば松生うる峯蚊帳越しに見ゆ。
——7月末

104　その昔還らぬ兄を送りたる母はも明日は次兄を遣るなり。
——8月9日

105　身も魂も君にささげたる武人の妻よ安かれ神守るらん。
——8月9日

106　外つ国へ兄旅立たば残るわれ二年の間を死して守らん。
——同上

107　昨日今日吹きては易る風なれど風に揉まれて樹は生うるなり。
——同上

108　うちに居て孟夏と競うおのこ我れ机に寄る額に火花や散らん。
——同上

109
若人の気ははやれども午すぎの暑さは烈(はげ)しいつしか居睡(いねむ)る。
——同上

110
わが友はただひとりにて筆と箸(はし)の働作(はたらき)負いて夏おくるなり。
——同上

111
おのがじし学びの道を歩みなば再(ま)た語らなん満月(もち)の頃。
——三神敏夫兄を想う
——8月9日

——下の数首、8月14日、母を送りて田沢温泉にゆきし時——

112
ゆくりなき旅こそ善けれ叔父上と温泉(いでゆ)の裏の山にのぼれり。

113
溪川のさやぐ小径をゆくなべに峯渡る雲の真白きを見る。

114
草茂きつづら折りなる山路(みち)を尽くして叫ぶ子らの声はも。

115
心なき雲とは想えど見渡せば浅間アルプス戸隠の山。

116
路の辺(べ)の青草の間(ま)に咲く芒花(おばな)秋風の音を見ると言わまし。

117
草合いに湧き立つ水を渇きたる喉(のんど)は掬(く)みて神酒(みき)とし味わう。

118
人ごえを樹の間に聞きてか知らねども歌を消したる山の鶯。

119
夜もすがら雨風あれにし朝ぼらけ虹は立ちたり大空高く。
——9月1日払暁の虹、創世記第9章を想う

120
中空を画(かぎ)りて立てる大虹の半を呑むか武蔵野の土。

121
東北の友は来れり語らんとかたみに思えど言あらなく。
——10月9日、友の上京せし時

——きよき「然り」——

122
澄み渡る秋のみ空を匂わせて処女はこたえたりわれゆかましと。
——10月半のこと、創世記第24章を想う

123　小雨降る秋の夕に結ばれし心は永久(とわ)に易らざるなり。
——10月16日

124　わがために七日をつくして帰る友を送れば空に月冴えわたる。
——10月16日夜

125　小鳥(とり)うたいみ空はほほえむこの朝けわが杯は溢れたるなり。
——10月16日

——新生にあたりて——

126　奇(くす)しかる神の摂理に胸うちて今ぞ立ちたり新しき路に。
——11月

127　羔の聖名をわれらは讃えつつ進みゆかなん峠の道を。
——11月

128　十字架の恩恵(めぐみ)に結(ゆ)われし心には羔の日の夢のみぞある。
——11月。黙示録19章、21章

129　人の世の波風も死もわかつなし主にある愛の永遠(とわ)のちぎりを。
——11月初め

130　むらさきに空の匂えばその面(おも)に輝きしるき星一つ澄む。
——秋の晨の明星、11月初め

131　朝ごとに西の小牖(まど)ゆ目を遣(や)るにわが山の峯(ね)の白さましゆく。
——11月初め

132　あれくる暴風雨(あらし)も何か聖言(みことば)のかげに安らう眠りありけり。
——11月半

133　幾年(いくとせ)も愛(め)で育(はぐく)みし独娘(ひとりご)を別れん嫗(おうな)の胸中(みぬち)思えば。
——11月半

134　母と娘(こ)は離別(わかれ)の期(とき)の備えして室をわかちていねたもうとは。
——11月21日

135　わが愛づる母娘(ははこ)の泪をわれはつゆ忘れざらなん神拭うまで。
——11月21日

136　さびしかる人の心の奥そこの涙ぞいのる聖国(みくに)来ませと。
——11月21日

137　智(さか)しかる此の世の智慧の結ぶ実(み)を豚にあたえて顧みはせじ。
——11月21日

138　神の賜(た)ぶいのちの智慧を喰(くら)いてぞわれは活くらめ塩なむるとも。
——11月27日

139　白がねの眉にも似たる月の華（はな）くれない残る西空に出づ。

——11月27日

140　一途の信頼（たより）はかたみに確くして永久（とわ）に易らずイエス在ませば。

——11月30日夕

141　ああダンテよ汝（な）が経（へ）めぐりし地獄こそこの末の世の故里ならめ。

——12月4日夜

＊

暴風雨（あらし）をのこして　闇をあとにして
舟路つつがなく　湊に来にけり
今より夜な夜な　畏こみ仰ぎて
讃えしたわまし　ベツレヘムの星

——旧讃美歌68ノ3

——12月7日夜

＊

あの「預言書の秋」のようにこの秋冬もまた明星が曙の空に輝いている。なやみある人々によき冬であるように。糧と火とが彼らを暖めるように。夜な夜な新しき讃美が救わるる魂からうたい出づるように。罪悪がつのるならば寒風があれくるうように。

12月9日晨　擱筆

ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中（ぐんちゅう）にて小さき者なり、
然（しか）れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。
その出づる事は古昔（いにしえ）より永遠の日よりなり。

——ミカ書第5章3節

制作・著作： HP「小池辰雄文庫」

ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24